大塚久雄著作集概略（未定稿）

株式会社発生史論と近代欧州経済史序説

株式会社発生史論は、1938 年 2 月、有斐閣から刊行された
この年、大塚は若干 30 歳
法政大学助教授であった
日中戦争が開始され、学問の自由が失われていった時代に刊行された、大塚の学問的原点をなす
近代資本主義を特徴づける株式会社は、歴史上どのようにして発生したのか
この点を近世の南ドイツ、イタリア、オランダ、イギリスなど各国の史実に探ったのが「発生史論」のテーマである
その際、大塚は二つの理論を駆使している
一、企業形態が歴史上、合名会社→合資会社→株式会社、と段階的に発展してきたのは何故か
この点を解明したのが「結合と支配」の理論である
二、初期の株式会社が株主総会を欠き、
専制型構造を取ったのは何故か
その理由を解明したのが「前期的資本」の理論である
この「前期的資本」こそ、大塚史学の根幹をなす理論的概念である
同書で論じられたオランダとイギリスの対比は、初期から晩年まで大塚の比較経済史の一貫したテーマであった
「発生史論」刊行から十か月後の 1938 年 12 月、大塚は第二作を表す
「欧州経済史序説」（時潮社）である
本書は、法政大学における経済史講義のテキストであり、学会への問題提起となった
「発生史論」とは性格が異なる
だが、「発生史論」のベースになった巨視的歴史像や前期的資本の理論は「序説」において一層深められている
ただし、同書については、史実の裏付けが不十分だ、との批判があった
これに答えるため、「序説」の贈訂版として世に通ったのが、「近代欧州経済序説・上巻」（時潮社 1944 年）であった（下巻は、著者の健康状態のため未完に終わった）ので大塚が問題としたのは、西欧の世界史的膨張という事実である
帝国イギリス、商業・貿易で発展するイギリスという今日の「通説」は、大塚にとってむしろ自明の前提であった
その事実から出発した大塚が辿り着いたのが、「国民的生産力」の問題であった
「発生史論」が株式会社としてのオランダ・イギリス両東インド会社の経営構造を比較したのに対して、

新「序説」では、両国の国民的生産力が対比され、世界に先駆けて産業革命のゴールに達したイギリスの「国民的生産力」の急激な展開に着目している
さらに、大塚は、この国民的生産力の問題を掘り下げ、「農村工業」「中産的生産者層」「マニュファクチャー」などの歴史的諸範疇に到達している
前期的資本に結びついた都市の織元にではなく、自由な農村においてマニファクチャーを営む織元に担われた毛織物工業こそ、初期資本主義の基軸としての経営形態であった
これらの著作の中で、大塚は、日本について一言も語っていない
しかし、「発生史論」後編には、戦後の民主化による財閥解体についての予言的示唆が見られる
新「序説」には、日本の膨張路線・帝国支配に対する批判を読み取ることができよう
「近代の超克」が叫ばれた戦時期にあって、大塚は、「近代への到達」の意義を示したのである
これらの著作は、日本が国際社会から切断された困難な時代に書かれた
そうした制約にもかかわらず、いや、むしろ、そうだったからこそ、大塚は、日本人としての視点に立ち、ヨーロッパ史を自覚的に再構成できたのである
学問の国際交流と一次資料の利用が当然の事となり、研究テーマの細分化と実証が進展する一方で、私たちは研究の根本的意義を見失い、迷路をさまよってはいないだろうか
大塚が示した研究姿勢と問題の立て方、そこから構築された歴史像で人間像に改めて学ぶ意義は大きい

「近代化の人間的基礎」と「宗教改革と近代社会」

戦前の日本は、政治的、経済的に強い「前近代性」を残していた
それだけに、戦後の農地改革や、財閥解体、天皇の人間化などの「制度改革」を大塚は歓迎した
しかし、「人間類型」の近代化は、戦後の容易ならぬ課題だとも見ていた
農村を基本として、閉鎖的な呪術的「共同体」(ムラ)意識や、地主等への擬制的な「親―子」関係を特徴とする共同体的な「人間類型」が、全国にみられた
この心性は、都市部に暮らす人々の内面にも広がっていた
こうした集団主義と、擬制的な「親―子関係」は、政治的民主化と、経済におけるフェアプレイ(労賃の問題を含めて）を阻害してきた
大塚はこの二つの著者で、戦後の制度改革を論じつつ、同時に「人間類型の近代化」の参考事例として、西欧史上の「封建制から資本主義への移行」を書くことにおいて生じた「近代的人間類型」の成立過程を語っている
特にイギリスにおける、中産的生産者層の経済的発展と、彼らが担った市民革命（ピューリタン革命）への経緯を（またアメリカのニューイングランドを中心とする、ベンジャミン・

フランクリンの生きた市民社会の形成過程をも)、大塚は、近代化と「近代的人間類型」を考える参考に呈し、
そこでは、次のような事情が、近代的人間類型を作り出したと論じている
① 一つには、イギリスでは早期の農民解放によって、領主と共同体から自由となった半農半工の独立生産者たちが出現し、局地的な市場を創って、コモンウイール（民富）の世界を形成しはじめ、それが次第に生産力ないし産業資本主義の発展をもたらしたこと
また一つには、②ルターの宗教改革が、世俗の職業を、単なる（なりわい）（生存手段）と見ることを禁じ、これを、相互の需要を満たす「隣人愛実践」として、神が人に与えた神聖な使命 Beruf であると意味づけたこと（爾来、プロテスタント文化の中では、この職業の理念が、人々の職業活動を積極的に動機づけた。特にイギリスに広がったカルヴァン派では、救いに関する「予定説」の影響が、心理的にも、職業労働に生きる禁欲的な人間類型をつくった）
③ この①と②が結びついて「社会的有益 Good of the many」
と思われた産業による「民富」の発展が促され、またその政治的な果実は「ピューリタン革命（市民革命）ともなったこと
　ここに、①と②の二つの条件が結びつくことで、「共同体」から自立し、擬制的な親子関係（親方関係）からも自立した「成人した人間」として、神との内面の関係に基づいて経済や政治において自由に行動する、西欧型の近代的人間類型・市民的人間類型が出現した
　極めて図示化すれば、大塚はこう論じている
（-----ちなみに、日本語の「職業」という言葉は、江戸時代の儒学の展開の中で独自に成立したものだと言われる
では、その場合の職業の「理念」は、ウェーバーや大塚の説く西洋近代の職業の理念とは、どのような関係にあるのだろうか
とは言え、西洋の初期近代のこうした意識も、「資本主義的営利」の意識へと世俗化を遂げる
「プロテスタントの職業倫理は、「資本主義の精神」へと変質する
人と人との関係としての経済は、商品と商品、貨幣と貨幣の関係に変容し、「資本主義下の人間疎外」顕わになる
マルクスはこの状況の「止揚」を目指して資本主義を分析した
戦後初期の大塚のこれらの著作には、後年の著書「社会科学の方法・ウェーバーとマルクス」のテーマへの言及も、すでに見られるのは興味深い
「近代化の人間的基礎」は、戦後日本の人間状況を診断し、「宗教改革と近代社会」は、参考事例としての西洋近代の精神史を論じている

「共同体の基礎理論」と「国民経済----その歴史的考察」

大塚久雄の目指した経済史研究の根本的な課題は、資本主義の発生と発展だが、その過程は同時に封建制の解体の過程であり、また共同体の解体過程でもある

「共同体の基礎理論」（初版 1955 年）は、資本主義の前史としての前近代社会を特徴付ける共同体の本質、成立と解体の条件を総体として理論的に見通すための見取り図である

資本主義社会の理論的見取り図は、経済理論であって、それは商品の生産と流通の論理を解明する

前近代社会の理論的見取り図は、土地の占取に注目する

それは、資本主義社会の富の基礎形態が商品（そして貨幣）であるのに対して、前近代社会では、土地が富の基礎形態であると考えられたからである

土地は生活手段・生活資料の天与の貯蔵庫であり、天与の労働の場所であり、原始的生産手段（棍棒や石器）の天与の武器庫であり、

さらに、人間すらも「台地の付属物として、家畜と並んで、客観的な自然物の系列のうちに埋没してあらわれる」

原始の人の群れは、土地を共同で占取し、それが原始的な集団性の基礎となり、その後の共同体にも土地の共同所有は引き継がれるが、他方で、自然物を利用して生産された鋤鍬やザルなど労働用具と、農耕牧畜文明における共同体では土地の一部も私的所有されるという「固有の二元性」が発生する

大塚は共同体における所有の二元性を、共同体に固有な内的矛盾（生産力と生産関係の矛盾）と言い換えても差し支えないと考えた

　したがって、共同体における私的所有の占める部分は、その共同体の成立する社会の生産力が高いほど拡大する

前近代の共同体の最後に登場するゲルマン的共同体にあっては、衣服や労働用具、家屋と庭・菜園のほか、すべての耕地・牧地が分割されて私的に所有され、相続の対象となっただけでなく、耕地と牧地の外側に広がる共有地（森林・原野・湖沼・池や川）の利用権（入会権）も分割されて私的に所有された

ここまで来れば、共同体が解体された社会、すなわち近代の資本主義を将来に展望することができる

　こうして「共同体の基礎理論」は前近代社会の理論的な見取り図であると同時に、資本主義への移行を可能にする条件が前近代社会の中に、どのように用意されたのかを検討するための手がかりでもある

「国民経済」は初めから一つの書物として描かれたのではなく、戦後 20 年の間にさまざまな機会に発表した小論を 1965 年にまとめて一書としたものである

しかし、そこには大塚の一貫した問題意識が貫かれている

第一は、近代社会を特徴付ける富の基礎形態（商品・貨幣）が、資本主義社会を生み出す際にとる「民富」（commonweal　Volksreichtum）という形態の意義である

それは単なる貨幣資本ではなく、独立自由な中産的生産者で、特に自営農民たちによる自由闊達な経済活動が行える場、ないし人間関係をも意味した
それゆえ、第二に、大塚の問題意識は、共同体を解体させながらあらわれる近代資本主義社会に特有な自由な諸個人の構成する社会構造に及んでいた
それは決して、孤立した経済主体が市場で単に己の欲望・必要を満たすためだけに、他者と取引関係に入るというドライな市場社会が形成されたのではなく、
「国民」という語で括りうるなんだかの凝集力を帯びた経済社会だったというのが、大塚の意図である
第三は、国民経済とは、国民経済計算（ＳＮＡ）の単なる単位でなく、それ自体として完結した経済圏をも意味している
他国の産業に依存した中継貿易型の経済では、完結した経済圏は形成できないが、
国内で社会的分業が高度に発展して、必要とされるもののほとんどが国内で生産され、国内で消費される自立した経済圏の形成こそが、近代主義の地理的・経済的な容器となったというのが大塚の主張である

「社会科学の方法」と「社会科学における人間」

　社会現象の理解を課題とする社会科学はどのような方法を用いるのか
経済的利害こそ規定的要因だとする当時の有力な見方（マルクスの唯物史観）にウェーバーのいう「文化諸領域の固有法則性」を対置し、従来の「マルクスかウェーバー」を「マルクスとウェーバー」に書き換えた大塚の「社会科学の方法」（1966）は多くの読者を得た
人は経済・政治・法・宗教・性愛・倫理・審美など、さまざまな文化領域に跨がって生きる
確かに経済的利害関心は、日常的に大きな規定力を持ち、行為の強い推進力である
だが、行為の向かう方向は、人間それぞれに願う望ましい状態である
「いま」と比べ、もっといい経済状態、より美しい世界、より多き善や正義、もっと公平な社会など
例えば、法という文化領域では、正義や衡平が求められる
そして、衡平性を高める力は、経済とは相対的に独自な「法」領域に固有の自立性を持って、歴史的に発展してくる
各領域に独自の合理化が進行するのである
ある時ある所に一定の経済的利害状況があったとして、そこでの法的領域での行為のあり方は、法の世界に固有な利害関心と日常を規制する経済的利害関心両方の影響を受けるだろう
法と経済とは、そのコアにある運動モーメントが異なるから、対立し反発するかもしれぬし、惹きあって重なるかもしれない
大塚は、この反発と親和の動態をウェーバーに倣って「緊張」関係と呼ぶ

文化諸領域それぞれが相互にこの緊張関係に立っている
こう考えると、歴史・社会とは、人間の営みの中に生まれた文化諸領域の固有法則性が緊張関係をなしている場である、と見えてくる
ウェーバーを読み込んだ大塚は、諸領域の中でも特に経済と宗教（思想）が重要であり、それゆえマルクスとウェーバーの方法が相補関係をなす、と論じた
マルクスも非経済領域が経済から相対的に自立していると言うが、その中味は、説明しなかった
それでもマルクス主義が強い影響力をもち得たことを、大塚は一元論の強さがその理由だ、と受け止めた
　マルクスの「経済学批判除・序説」冒頭節は、通例「社会において生産を行う諸個人、したがって諸個人の社会的に規定された生産が出発点である」と訳されるが、大塚は「社会をなして生産しつつある諸個人」と訳す
あらゆる社会現象は諸個人の行為連関からなっている
その個人がどのような性質を持つ人間かによって、社会的行為も経済を含む社会現象も変わってこよう
ここから次の研究プログラムが生まれる
すなわち、出発点としての人間にこだわり、その類型的特質の深い理解から多様な経済社会現象の説得的な説明を行う、というもので、この研究方向の意義を論じたのが「社会科学における人間」（1977）である
この書で大塚は、D・デフォーの小説に素材を取り、近代の合理的な産業経営資本主義を作り上げた「ロビンソン的人間類型」を説明し、あわせて大塚史学の基本線を解いた
また、資本主義が「自然発生的分業」から発展する過程を描き、そこにマルクスのいう「物神性」、つまり「人はモノのお付き」状況が現れることを説明する
だが、ロビンソンとは異なる人間類型を前提としたときに「資本論」や近代の経済学は普遍的な説明能力を持つだろうか
大塚は、マルクスにこの予感があり、彼には人間類型論の萌芽があった、とした
そしてウェーバーの宗教社会学研究から、世界宗教の諸領域に独自の人間類型が折出できることを学べば、西洋出自の近代的社会科学の限界が理解出来、文化人類学・比較文化研究等の進展によって、新たな知見や洞察が得られる、とした
　大塚のマルクス理解については、短いものだが、石崎津義男「大塚久雄　人と学問」（みすず書房　2006 年）に付された「資本論講義」が参考になる

「生活の貧しさと心の貧しさ」と「意味喪失の時代に生きる」

　大塚久雄は専門の経済研究とは別に、折に触れ、矢内原忠雄、森有正、湯川秀樹、内田義

彦などの著名な学者と「対談」をしている
また、内村鑑三（無教会主義）の流れを汲むキリスト者であったことから、求めに応じて、専門分野を超えた「執筆」やキリスト教関連の「講演」も行っている
執筆物を含め、そうした「対談」や「講演」を集めたものが、この二書の内容である
ただし、教会（国際基督教大学の礼拝堂）で講演をする場合でも、大塚は専門の伝道者ではなかったから、直接福音を説くなどの伝道活動はしていない
あくまでも平信徒、一般信徒の立場から、いち社会科学者として、特にウェーバーの宗教社会学の概念を駆使して、信仰と世俗、学問（科学）と信仰、信仰と社会など、この世界のさまざまな営み、（文化諸領域）と信仰との接点を扱っているのである
実は、このアプローチの仕方こそが、大塚の醍醐味であり、特徴的なこととして記憶される必要がある
前著の「はしがき」において大塚は、さまざまな機会に語られたものにも関わらず、一書にしてみると「全体を貫いて何か一本の線が通っているように感じられる」と書いているが、読者としてこの二冊の本を読んでみると、そうした記述どおりに、後者も含め、大塚の立場や視点が終始一貫していたことに気付かされるであろう
　それでは、その一貫性を形作る要素はなんであったのか
まず、大塚が好んで用いる言葉に「真理」や「真実」、それに対する「畏敬の念」がある
これは、真理愛を前提とした「事実を事実とする態度」「正しいことを正しいとして勇敢に主張するという心情」と言い換えられる
大塚のこうした発言の根底には、内村鑑三の「事実の信仰」（「事実の子たれよ。理論の奴隷たるなかれ」）が横たわっている
ついで、大塚の眼差しで印象的なのは、政治的に「虐げられている者」、経済的に「貧しい者」「無きに等しい者」、能力的に「無力で無知な人々」、人生の「苦難の中にある人々」など、
いわば、そうした社会的弱者に対する救済を「苦難の神義論」（この世界における諸々の苦難を通じて神の「義の実現」から告知した点である
物質的な欠乏から生じる「生活の貧しさ」と並んで、個々人の「名誉感の喪失」や「生きる意味の喪失」（「心の貧しさ」）からの救済も、同様である
大病のために大きな手術を経験し、何度も「苦痛」を味わった大塚ならではの説得力がそこにある
　そして、大塚にとり、富者や貧者とは関係なく、現代社会に共通の深刻な問題として意識されるのが、「世界の無意味化」「世界の意味喪失」という現象である
何らかの設定された目標を達成するための「形式合理性」（数量化、数字化）の貫徹が、元々存在した目標（価値意識）を遠のけ、「数字のロマンチシズム」の加速化とともに「無意味化」「意味喪失」を引き起こすという事態
こうした事態に対処する方法を大塚は、正しい意味での「宗教の復位」に求めている

　対談を含む、この二つの講演集は、大塚久雄の経済史学の背後にある価値意識（「知るに値するもの」）を知るためにも重要な二冊である
大塚は、「問題の中心は、この意味を喪失して、ただ自己運動する機械のようになってしまった世界を、もう一度、生き生きとした価値と世界に結び付け、---文化諸領域相互の間に統一とバランスを取り戻すことにあるからです」（「世俗化の中の宗教」）と唱える
「生き生きした価値の世界」を謳う大塚の価値の源泉はどこにあったのだろうか
それをたどることは、大塚の経済史研究の問題の立て方を解明する手がかりとなるだろう

以上